

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10318

研究課題名（和文）乳がん患者の思春期の子どもへの病気の説明に関する意思決定プロセスと影響要因

研究課題名（英文）Decision-making process and influencing factors for the explanation of the disease to adolescent children of breast cancer patients

研究代表者

尾沼 奈緒美（Onuma, Naomi）

愛知県立大学・看護学部・講師

研究者番号：00295627

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、（1）乳がん患者が思春期の子どもに病気について説明することに関する意思決定支援の現状と課題を、患者を支援する看護師の認識を通して明らかにし、（2）乳がん患者の意思決定プロセスとプロセスへの影響要因を質問紙調査を通して明らかにし、（1）と（2）の結果に基づき支援プログラムを作成することを目的とした。しかし、諸事情により計画通りに進めることができず終了となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

諸事情により計画通りに進めることができず終了となったため、記載できる事項がない。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to (1) clarify the current status and challenges of decision-making support for breast cancer patients to explain the disease to adolescents through the perceptions of nurses who support patients, and (2) conduct a questionnaire survey on the decision-making process and influencing factors of breast cancer patients based on the results, and create a support program. However, due to various circumstances, it could not proceed as planned and was terminated.

研究分野：がん看護

キーワード：乳がん患者 思春期 意思決定支援

1. 研究開始当初の背景

子どもを持つ乳がん患者は、がんという診断に衝撃を受ける中で、自分のことだけではなく、家事や子どもの世話をどうするのか、子どもに何をどう伝えるのかに対処しなければならない事態に直面する。初期治療は手術療法であり、治療に伴うボディイメージの変容が大きく、病状によっては長期に渡る治療が必要になる。乳がん罹患は患者、家族に与える影響が多面的で、その影響は長期に渡るといえる。

Seiple & McCance (2010) は、子育て中の親のがん罹患体験に関する重要なテーマとして「子どもへの告知」「子どもにとってより良い親であり続けること」「家族の中での役割を継続すること」を示した。患者は、病気を受け止めることに精一杯な状況の中で、より良い親でありたいと思い、子どもへの影響を考慮しつつ病気を伝え(藤本・神田, 2014) 病気を子どもに説明する、説明しない、いずれの意思決定の場合も、子どもとの良い関係を維持したいという患者の思いが根底にある(小林, 2014) ことが示されている。

意思決定とは複数の選択肢の中から一つを選ぶことであり、患者が子どもに自分の病気について伝えることに関する意思決定は、不確実性下における意思決定といえる。この意思決定には、患者自身の病状認識や身体的状況、対人関係における価値観のみならず、患者と子どもや他の家族、医療者との関係性、子どもの年齢や状況など、様々な要因が複雑に絡み合い影響すると考えられる。他方、乳がん患者の子どもについては、その半数に母親が病気になった体験に関する心的外傷後ストレス症状が認められ(真部ら, 2011) 中でも、一人親家庭、きょうだいが少ない、第一子、学童期の子どもは、有意に情緒・行動の問題が生じやすい(Visser et al, 2006) 子どもをもつがん患者の支援においては、家族の特徴を理解し、子どもも含めて考えることが重要である。

がんの親をもつ子どものサポートプログラムとして CLIMB® プログラムがあり(Peter 2006) 日本では Hope Tree がプログラムの開催や全国機関での開催の支援を行っている。このプログラムは 6 ~ 12 歳の子どもとがんと診断された親が対象であり(Hope Tree, 2016) プログラムの効果として、親の病気にまつわる子どもの心的外傷後ストレス症状が減少し、がん患者である母親の QOL に改善が認められた(小林, 2012) 。

しかし、日本における思春期の子どもを持つがん患者や子どもに関する研究は少なくプログラムについての報告も認められない。思春期は、身体的、心理的、社会的に不安定な時期であり、子どもから大人への変化の時期である。このような特徴を持つ思春期の子どもは親のがんと診断され治療を受ける状況では、子どもは自分自身の不安定さに加えて親のがん罹患に伴う出来事にも対処しなければならない。Jansson & Anderzen-Carlsson (2017) は、親のがん罹患時の思春期の子どもは「変化した世界で自分自身と自分の居場所を見つけること」を示し、子どもは親のがん罹患により大きな影響を受けるが、適切な支援を受けることで自分や家族を守り、信頼できる人との絆を強め、状況に対処できると考えられる。しかし、Huizinga et al (2010) によると、がんである親をもつ思春期の子どもは高ストレス反応症状(SRS)は診断後1年で14%に認められ、高SRSの子どもは情緒的・行動的問題を抱え、親は子どもの問題に気づいていなかった。親や子どもに適切な支援がなければ、家族が問題を抱えたままになる可能性がある。また、Meriggi et al (2017) は、3 ~ 18 歳の子どもをもつがん患者の親の高い不安と抑うつは、家族間のクローズドコミュニケーションと有意な相関があることを示した。親への支援により不安と抑うつが軽減すれば、家族間のオープンコミュニケーションが可能になることが考えられる。Bugge et al (2009) によるがんを患った親とその子どものための支援プログラムの評価研究では、親は子どもと話し合い病気について伝え、子どもの反応や困難な問題へ対処し、家族の内外の資源を明確にし家族の絆を強め、将来を計画することについて支援を受けて実際に行動できたことが示された。思春期の子どもをもつがん患者である親に適切な時期に支援を提供することは、患者だけでなく子どもを含めた支援につながると考えられる。親を支援するプログラム作成の基礎資料とするために、患者の思春期の子どもへの病気の説明に関する意思決定プロセスと影響要因を明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、(1)乳がん患者が思春期の子どもに病気について説明することに関する意思決定支援の現状と課題を、患者を支援する看護師の認識を通して明らかにし、(2)乳がん患者の意思決定プロセスとプロセスへの影響要因を乳がん患者への質問紙調査を通して明らかにし、(1)と(2)の結果に基づき支援プログラムを作成することを目的とした。

3. 研究の方法

面接調査の対象者について、当初は乳がんの手術療法を受けた Stage Ⅰ の患者としていたが、対象者を得る見通しが立たなくなり、多施設の専門看護師および認定看護師に変更した。また、乳がん患者を対象者とした調査方法を面接調査から質問紙調査に変更した。

(1)乳がん患者を5年以上支援しているがん看護専門看護師、乳がん看護認定看護師を対象

に、意思決定支援の現状、その現状に影響する要因、現状を踏まえてさらに必要だと考える支援、支援を通して認識している患者の置かれている状況について、半構造化面接によりデータを収集、分析し、(2)思春期の子供を持つ乳がん患者を対象に、乳がん患者の思春期の子供への病気の説明に関する意思決定プロセスとプロセスへの影響要因、必要な支援や時期に関する質問紙を作成、実施し、(1)および(2)の結果に基づき支援プログラムを作成する予定であったが、諸事情により計画通りに実施できなかった。

4．研究成果

計画通りに進めることができず終了となったため、記載できる事項がない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------